
演題名：当院で免疫療法後にサルベージ術を行なった 5 例の検討

演者氏名：仁科 麻衣

所属先：近畿大学 外科学教室 呼吸器外科部門

・筆頭著者：仁科 麻衣、共著者：老木華 福田祥大 小原秀太 西野将矢 濱田顕
千葉真人 伊藤正興 武本智樹 氏家秀樹 津谷康大

・所属施設：近畿大学 外科学教室 呼吸器外科部門

【背景】非小細胞肺癌に対する免疫療法は、従来の化学療法と比較して良好な成績であるが、進行期肺癌におけるエビデンスは十分ではない。

【方法】当院で化学免疫療法後にサルベージ手術を行なった 5 例について検討した。

【結果】症例 1 は 56 歳男性。胸膜播種を伴う原発性肺癌の診断で免疫療法施行後、irAE により治療を中止。その後胸壁転移を認め、化学免疫療法へ移行も、原発巣増大を認め、手術加療の方針となった。右肺上葉切除+胸壁合併切除施行した。術後 6 年 3 ヶ月で原疾患により死亡した。症例 2 は 82 歳の男性。癌性胸水を伴う原発性肺癌の診断で免疫療法施行し、irAE により治療を中止。その後対側肺に結節を認め手術加療の方針となり、右肺下葉 S6 区域切除を施行した。術後縦隔リンパ節再発を認めるが、経過観察のみで 4 年以上生存を得ている。症例 3 は 71 歳の男性。脳転移・骨転移を伴う原発性肺癌の診断で開頭腫瘍切除ののち、化学免疫療法を施行し、PR を維持。手術加療の方針となり、左肺下葉スリーブ切除と、骨転移巣への放射線照射を施行した。術後は維持療法を継続したがリンパ節再発を認め、術後 1 年 3 ヶ月で原疾患の増悪にて死亡した。症例 4 は 61 歳、男性。脳転移を伴う原発性肺癌に対し開頭腫瘍摘出術を施行し、化学免疫療法を施行したのち手術加療の方針となった。左肺上葉部分切除施行し、術後は維持療法を施行したのち、再発なく 4 年経過している。症例 5 は脳転移を伴う原発性肺癌の診断で、化学免疫療法を施行し、手術加療の方針となった。右肺上葉切除を施行し、脳転移に対し定位照射を施行した。術後 2 年 6 ヶ月で骨転移再発を認め、その後肺転移も出現し、術後 3 年 9 ヶ月で原疾患により死亡した。

【結論】サルベージ手術とは、切除不能例に対し化学療法など施行ののち、残存腫瘍が切除可能であるときなどに考慮される。近年では免疫療法後の進行非小細胞癌に対するサルベージ術について安全性と高い奏効率の報告もある。当院における 5 例において振り返ると、死亡症例もあるものの、いずれも初診時から長期生存を得られており、OS の延長に免疫療法後のサルベージが寄与していると考えられる。術後の病理結果においては、Ef.0-1 が多く、手術加療により局所制御が可能となった可能性がある。一方で、術中では治療による影響と思われる強い癒着などを認め、操作に難渋する症例もあり、安全な手術操作が求められる。今後もさらなる症例の蓄積が求められる。